飢餓対策 NEWS　第 245 号　発行日 2010 年 11 月 20 日（毎月 20 日発行）定価 15 円

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry：略して JIFH）は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981 年にひとりの日本人がインドシナ難民救援に参加したことを契機として誕生しました。以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）の一員として、18 ヶ国 55 の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

マレーシア学校支援

金城学院の皆さんの思いがこもった机と椅子が到着！

名古屋市の金城学院中学校・高等学校の皆さんから送られた机と椅子 1000 セットが 8 月 25 日、無事マレーシア　サバ州に到着。さっそく東マレーシアのヌンパック希望学校、テンギランビジョンスクール、コウニンアウ希望学校などに届けられました。1 人づつ自分の机が与えられて子どもたちは大喜びです。

金城のみなさん、ありがとうございました！

本 de リンク！大好評です

～眠っている古本や CD で国際協力～

使い終わった古本や音楽 CD、DVD、ゲームソフトを愛知事務所までお送りください。洋書、楽譜、絵本なども大歓迎です。換金したものは、全て飢餓と貧困に苦しむ方々のために用いさせて頂きます。詳しくは愛知事務所までお気軽にご連絡ください。

TEL: 052－731－8111
Email: aichi@jifh.org
（9月～10月にお送りいただいた数）
本：984 冊、CD：75 枚
DVD：2枚、ゲームソフト：22 本

ハンガー・ゼロ・サポーター大募集中！

今すぐ▶▶▶ 各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

□ ハンガー・ゼロ・サポーターとして協力します。
毎月（　　）口、協力します。（1口 1,000 円）
□ JIFH会員になり毎月定期的に財的協力をします。
毎月（　　）口、協力します。（1口 500 円）
□「世界里親会」に協力します。
説明書、里親会入会申込書を送ってください。
□ 海外派遣スタッフを支援します。
毎月（　　）円（　　）スタッフ指定
□ 海外派遣スタッフを支える会の会員になり、
協力します。毎月（　　）口（1口 1,000 円）
□ 郵便自動引落の申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名：　　男・女

〒
フリガナ
住所：

（電話）

▼申込日：　　年　月　日▼

FAX・072-920-2155

今年のクリスマスの贈り物に

クリスマスに国際協力カレンダーにフェアトレードのチョコレートを添えてプレゼント！

好評をいただいている2011年のカレンダーをクリスマスプレゼントとしてお友達に贈りませんか。カレンダーを通して新しい世界が広がります。

この他にフェアトレード（公正な取引による貿易）のチョコレート、コーヒー、ココア、紅茶がございます。いずれも自信を持ってお勧めできる商品です。この機会にどうぞご利用ください。

詳しくは㈱キングダムビジネスのホームページ又は下記連絡先へ
http://www.kbwin-win.org/
TEL：072-940-6814
FAX：072-940-6824

★ご協力を感謝します★皆様に飢餓対策ニュースをお届けするために、毎月、ひばり障害者作業所（八尾市）、生活愛（大阪市など）、そして関西一円のボランティアの皆様が発送作業のご協力をして下さっています。ありがとうございます！

■発行者　岩橋竜介
■発行所　一般財団法人　日本国際飢餓対策機構
Web サイトアドレス　http://www.jifh.org/
e メールアドレス　general@jifh.org
■郵便振替　00170-9-68590 ／日本国際飢餓対策機構
※支援金は随時受け付けております。

大阪　〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1
TEL (072)920-2225　FAX (072)920-2155
東京　〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCCビル 517 号室
TEL (03)3518-0781　FAX (03)3518-0782
愛知　〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F
TEL (052)731-8111　FAX (052)731-8114
広島　〒731-0103 広島市安佐南区緑井 2-21-23 201 号
TEL (082)831-1214　FAX (082)877-3961
沖縄　〒901-0156 那覇市田原3-8-1 ユリ香ハウス 201号
TEL (098)859-4585　FAX (098)859-4540

携帯サイト

日本国際飢餓対策機構
2010 No.245　12

飢餓対策 News

ルワンダのREACH 青少年のためのプログラム

関心を持ち続けることこそ

「1994年、虐殺者は家々を破壊し、財産も全て奪い、私の4人の子どもの内3人も殺害しました。その後の2年間は、誰も自分を愛し気にもかけてくれないと思い、自分の存在の意義や尊厳など、人間としての尊さをまったく感じることができませんでした。生き残った自分が惨めでならなかったのです。しかし、REACH（平和構築NGO：JIFH協力団体）が手を差し伸べて関わってくださることで、自分が普通の人間であることを再確認できました。」

今年10月末に3度目のルワンダ訪問が実現し、冒頭の言葉は今回お会いした虐殺生存者フィロメンさんの証言です。1994年4月から始まったフツ族急進派によるジェノサイド（集団殺戮）は、鎮圧される7月までの約3ヶ月間に、80万人とも100万人とも言われるツチ族の人々と、虐殺に与しなかったフツ族の人々が虐殺されました。当時の国際社会、特に列強国はルワンダの惨劇を知りながらも自国の国益に適わぬものとして黙殺しました。国際社会の無関心が、この惨劇を拡大したと言えます。

あれから16年、世界の多くの人々の関心とREACHの具体的な働きかけが始まり、加害者の暴力によって踏みにじられた被害者の人間性や、奪われた尊厳の回復が徐々になされ、被害者と加害者の間に赦しと和解が生まれています。

フィロメンさんはこう結びます。「人は困難に遭遇すると神から離れてしまいがちですが、神は決して私たちを見捨てない。多くの人々が私たちに関心を向けてくださることによって私は神に愛されていることをもう一度知りました。」

世界にある飢餓や貧困、紛争や差別によって苦しむ人々に関心を持ち続けてゆくこと、決して無関心にならないこと、これが誰もができる問題解決への一歩ではないでしょうか。

「主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。
恐れてはならない。おののいてはならない。」
申命記31：8

国内啓発総主事　田村治郎

1 分間に 17 人（うち 12 人が子ども）・1 日に 2 万 5 千人・1 年間では約 1,000 万人が、飢えのために生命を失っています。

愛の輪をさらに大きく力強く!!

あなたから広がるハンガー・ゼロ

「この村では亡くなった人はいなかったのですか」私たちと同行していたバルナバスファンドのマークグリーンさんが尋ねると「大人で死んだ者はなかったけれど、乳飲み子で母親の栄養が足りなくて死んだ子どもがいたよ」と村人が答えました。

6月10日、英国のBBCニュースが「ニジェールの静かな危機」と題してこの国の現状を訴えました。私たちにも、協力している団体から西アフリカの飢えの現状が寄せられ、サヘル、特にニジェールの深刻な事態を突きつけられました。「大きな警告を発しても、飢える人のかぼそい声はかき消されてしまう。だが深刻な飢餓は日一日と進んでいるのだ」とニュースや仲間は訴えていました。

私たちは、イギリスのバルナバスファンドという団体が、ここ数年間ニジェールで現地のパートナーを通して、とてもよい働きをしていることを知りました。そこで日本国際飢餓対策機構として協力を申し出ました。そして日本でハンガーゼロのアピールを行って、皆様からお寄せいただいた支援金により、第一段階として緊急に必要な物を送らせていただきました。

収穫前の飢餓が一番深刻な時期に、ドォーチ、マラディーの地域1,432家族に対して穀物と医薬品を届ける事ができました。（NL10月号に詳細）

9月には、岩橋理事長と現地に足を運び、バルナバスファンドのスタッフと共に現場を歩きました。そして村を訪ねたときに、村人が冒頭の言葉を語ったのです。皆様からのご支援によって、多くの人々のお腹を満たすことができました。しかし、この言葉から乳飲み子はその前に死んでしまったことを知りました。自分の腕の中でわが子が死んでいくのに直面したら、私はどうするだろう、親ならば、代わってやりたいと思うことでしょう。このような子どもやお母さんをなくすために、ぜひハンガーゼロ・サポーターになってください。そして、プラスワン＝家族や友達にも紹介していただきたいと願います。

ニジェールだけではなく、南部スーダンの子ども給食支援、ジンバブエの子どものエイズ患者給食支援、ケニアの子ども教育支援、またチャドにもたくさんの必要があります。今まで取り組んできたウガンダの里子支援やルワンダの平和構築プログラムなども継続しつつ、新たな必要にもぜひ応えていきたいと願っています。そのためには多くのハンガーゼロ・サポーターが必要です。

お友だちにご紹介ください

今回、すでにサポーターになってくださった方のために「ゼロ＋ONE（ゼロプラスワン）ご紹介セット」を作成しました。中身は、JIFHパンフレット、DVD（ニジェール視察、ハンガーゼロ紹介映像を収録）、ハンガーゼロ・ポスター、チラシ、募金箱、ステッカーなどです。このセットを使ってあなたの職場の同僚や学校の友人にご紹介いただきたいのです。セットは、JIFHの事務所やホームページから申し込んでいただけます。

ゼロ＋ONEセットの内容

アフリカの飢餓を無くすために、乳飲み子が栄養不足で亡くなることがないように、子どもたちが希望を持って生きていくことができるように、是非ハンガーゼロ・サポーターの輪を広げてください。

（報告：常務理事　清家弘久）

●ハンガー・ゼロ・サポーターのお申し込みは、専用ウエブサイト http://www.jifh.org/hungerzero/　からもできます

…「ジェームスのクリスマスプレゼント」…

アフリカで出会った人々

ルワンダ駐在スタッフ
竹内　緑

今回は、かつての同僚を紹介いたします。彼の名前はジェームス、ケニヤで生まれ育ったケニヤ人です。ケニヤは1960年代の初頭、統治国であったイギリスから独立しました。ジェームスの父と兄は、イギリスとの独立闘争に加わって殺害されました。兄は、槍の刺さった穴へ落とされと言います。更に母もこの闘争に加わって投獄され、激しい拷問を受けました。解放された時にはすっかり容貌が変わって、幼かったジェームスには母であることが分からなかったと言います。彼女は解放後まもなく悲嘆の内に亡くなり、この時ジェームスは６歳、残った家族はひとりの妹だけでした。

孤児となったジェームスは、ある宣教師の支援によって何年も遅れて小学校へ入学し、大学まで行くことが出来ました。そして彼は国際的な援助団体で働き、やがて私共の国際飢餓対策機構で働くようになりました。私がジェームスに出会った1993年当時、彼は家庭を持ち４人の子どもの父でした。

ジェームスは、孤児という背景からくるのか、多くの人が見逃すような点に気付く人でした。アメリカ人やイギリス人、オーストラリア人など、英語が母国語である人たちが同僚という職場で、言葉に悩んでいた私を励ましてくれたのでした。

ジェームスの家庭の経済事情は、ケニヤでは中流と言えるでしょう。豪邸を所有する富裕層ではなく、貧困家庭でもありませんでした。ナイロビの郊外に持ち家があり、敷地内には十数羽の鶏を飼っているケニヤではよく見られる家庭でした。

クリスマスの近づいたある日、ジェームスは子どもたち４人を集めて言いました。「今年のクリスマスは、貧しい人たちへ贈り物をするため、君たちへのクリスマスプレゼントはないけれど、それでもいい？」と。すると子どもたちは全員父に賛同したと言います。最年長の子どもは10歳、最年少は４歳でした。この年ジェームス家族が、スラムの貧しい人たちへ贈ったクリスマスプレゼントは、何10kgかのジャガイモとキャベツでした。

マザー・テレサは、「生きている愛は傷つきます」と言っています。愛には、犠牲や何らかの痛みが伴うと言うのです。

ジェームスが子どもたちに与えたクリスマスプレゼントは、目に見えるものではなく見えないものでした。それは、優れた愛の教育として彼らの心に残っていることでしょう。あれから十数年を経て、彼らはどのような大人になっているか会いたいものです。

竹内　緑
1993年以来、ソマリア、旧ザイール、アンゴラ、エチオピアで緊急支援に従事。2006年9月からルワンダのカモニ郡でトラウマ被害者支援に取り組む。

世界里親会

日本国際飢餓対策機構の世界里親会では、2011年１月からフィリピン・ミンダナオ島カランバサン地域の貧困家庭の子どもたち200人の心とからだの健全な成長を応援するために、サポートしてくださる里親さんの募集を始めました。愛を分かち合うクリスマス、ぜひ子どもたちを覚えていただき、彼らが希望をもって歩み出せるように応援してください。

クリスマスに愛の贈りものを

フィリピンの子どもたちを応援してください

200人の里子を支援する里親さんを求めています

訪問した学校の先生の話では、お昼ご飯の時に、生徒の30%はおかずとご飯のあるお弁当を持って来ますが、お弁当を持って来なかったり、持ってきてもトウモロコシだけということで差別を受け、空腹で、みじめで、恥ずかしい思いをする子もいるということです。

「この地域に暮す人々の**40%は１日１食**で、食べられない日もあります」。これは、フィリピン・ミンダナオ島カランバサン地域の宣教師、コン氏の言葉です。

フィリピン・ミンダナオ島のダバオから車で６時間。このカランバサン地域の人々は、もともとは山で野生動物を狩り、稲を栽培して日々の糧を得、首長たちが部族を導いて平和な暮しをしていました。しかし1960年以降商業目的のジャングル伐採が始まり、それをめぐる首長たちの争いが起こった上に、地域全体が当時のマルコス政権に反対する共産軍の隠れ場となって、人々は本来の住まいから出ざるを得なくなったのです。

山から下りてきた人々は、政府から小さな居住地を与えられていますが、そこは水道、トイレも整備されておらず、木の板の壁を立てトタンの屋根をくくり付けた家に住んでいます。衛生状態が悪く、常にマラリヤや熱病、結核、皮膚病などに脅かされています。現在ここでは約５万人が暮しています。

一日一食以下の生活

この人々の暮らしはとても貧しく、主な収入は地主の畑仕事の手伝いで1日250円程度です。１家庭には５～７人以上の子どもがいて、一日一食以下で生活しています。子ども達は栄養不足の為に痩せて元気がありません。栄養不良の為に視力を失ってしまう子もいます。

カサバラサン地域の住居

家計の足しにと町へ出稼ぎに行く親もありますが、仕事といっても「爪切り」のような仕事しかありません。

地域には学校もありますが、貧しさゆえに子どもも農作業に駆り出されるため、通学を始めた子どもも、欠席、中退する子が多いのが現状です。大人や青年たちは、貧しさを忘れようとして、お酒やマリファナに溺れる人が多く、その結果、争いごとがたびたび起きています。

「親から子どもたちに引き継がれていくこの負の連鎖を断ち切るためには、教育を通して正しい価値観を身につけることが必要です」と、この地域で15年間カランバサンの人々を支えてきた責任者であるコン氏は語ります。

この必要に応えるために日本国際飢餓対策機構の世界里親会は、貧しさゆえに学校に通えない子どもたち200人の支援を始めることにしました。子どもたちが正しい価値観を持って育つためには教育が必要です。それとともに食べ物も欠く事ができません。子どもたちがやがて地域の将来に貢献する人となること、私たちはそこに希望を持っています。そのために皆様のご支援がどうしても必要です。どうぞこの子たちの里親になって子どもたちと地域の人々を応援してください。

子どもの成長を見守る喜び

ひとりの里子を一ヶ月4,000円で支援することができます。それは現地の子どもたちの人生を変える、とても大きな支えとなります。職場の同僚や学校の友人、ご近所のお母さんたちで一人を支える事（グループ里親）もできます。里親として手紙で子どもを励ましたり、送られてくる手紙や成長記録、絵によって、子どもの成長を共に喜びまた見守って頂いたりすることができます。ぜひあなたも里親になって子どもの成長を応援してください。

■里親になるためには■

カラバサン地区での里子支援は２０１１年１月からスタートいたします。里親のお申し込みは、当機構各事務所まで電話、ファクシミリ、郵便、電子メールで「フィリピン里親希望」とお書きください。またホームページからもお申し込みを受付ます。お申し込み後、当機構より里子についての資料をお送りいたします。子どもの成長のためにもできるだけ長期間の応援をお願いします。また、資料請求や支援方法などについてのご質問など、いつでもお気軽にお問い合わせください。

2010年6月末、私は国際飢餓対策機構（以下、FH）カンボジアでの仕事を終え、帰国いたしました。FHカンボジアの一員として、“住民の自立を目指した支援”を試行錯誤した6年半でした。また、試行錯誤の中で、「自分が変わる事によって周りに変化をもたらす」というFHの中心理念を深く考えさせられることになりました。

カンボジアで得たもの

前カンボジア駐在スタッフ　吉田真記

最初の赴任地　チュークで

私は、FHがこの地域で活動を始めてから12年経った頃に赴任しました。FHスタッフと住民との関わりは深く、地域に根付いている印象を受けました。赴任後しばらくしてから「2年後に活動を終了する」という発表があり、FHスタッフも住民も、「えっ本当に？」という驚きと共に、よい緊張感を持つようになりました。もちろんそれまでも、いつかは活動を終了すると思いながら仕事をしていましたが、実際に期限が提示されると張り合いが出るものです。

赴任当初、農業プロジェクトのスタッフとともに吉田スタッフ（中央）

私が携わっていた農業プロジェクトでは、地域住民のモデルとなる農家づくりをしていました。野菜畑、堆肥作り用の容器、自然農薬作り用の瓶、魚を飼う池など、有機農業を実現するための農場が整いつつありました。しかし、モデル農家もその周辺農家も私たちFHスタッフに頼り切っていました。

FHの活動終了後は、モデル農家自身が自分の農場を管理し、周辺住民に技術を伝達することが必要です。私たちは、地域住民に頼られることを喜んでいました。しかし、私たちではなく、モデル農家が頼られる存在になるよう、私たちは裏方にまわる努力を始めました。そして、少しずつ自分の役割を自覚するモデル農家がでてきました。

気づかされた問題点とは

FHスタッフ㊗とモデル農家の女性

しかし私たちは失敗にも気付きました。モデル農場の中にはお金がないと真似できない設備が一部にありました。これでは、周辺農家、特に貧しい農家が真似をすることは困難です。活動終了が現実となった時、活動の中で効果があった部分、そうでなかった部分が見えるようになったのでした。このことは私たちの教訓となりました。

新活動地　アンロンベンで

チュークでの教訓によって、新活動地では、活動終了時期を初めから設定する（６年後、延長しても９年後）、住民の依存心を生む物質的支援を初めからしない、という方針で活動を始めました。アンロンベンには、すでに緊急支援をする他団体がいて、もうすぐ活動を終了することになっていました。私たちの役割は、緊急支援の次の段階である「自立を目指す人づくり支援」でした。私たちは、「あなたの村の開発は、FHではなく、あなた方自身がしなければ！」と住民を励ましました。しかし、物をもらうのに慣れている住民にとって、FHは何の魅力もない団体でした。住民との関係作りに苦労した私たちは、一度だけ物質的な支援をし、保健衛生や農業などの勉強会を定期的に持ちました。

1年経った頃、仲良くなった住民と協力して活動できるようになってきました。しかし、今度は、仲良くなった住民との活動だけで満足すると、地域の最も貧しい人々（NGOの活動に参加しない方が多い）に支援が届かないまま、活動を終了する恐れが出てきました。

そこで、彼らが活動に参加するにはどうしたらいいのかをスタッフで話し合うことになりました。しかし、話し合いをする中で気付かされたのは、問題は貧しい人たちにあるのではなくて、私たち側の優先順位にあるのではないか、ということでした。話し合いのテーマは、“どうしたら彼らが活動に参加するようになるか”ではなく、“私たちは、最も貧しい人を支援することと、FHの仕事を効率的にすることどちらを優先にするのか”であるべきでした。

私も求めていきたい

「自分が変わる事によって周りに変化をもたらす」これは、FH全体の中心理念です。

私はFHカンボジアのスタッフと共に試行錯誤を続けてきましたが、私たち自身が変わらなければいけないことは、一番見えない、見たくないことでした。それが明らかに見えてきたのです。

私のカンボジアでの任期は終了いたしましたが、今後も私自身がこの理念に沿った生活をしていきたいと思います。また、FHカンボジアのスタッフも、自分自身の課題としてこの理念に取り組んでいかれることを願っています。

これまでの皆様のご支援を心から感謝申し上げます。今後、この経験が生かされていくこと、また、益々皆様との関わりが深まっていくことを楽しみにしております。ありがとうございました。

FHカンボジアのスタッフ